

ケアセンターけやき

門傳 尋子(通所介護 / 生活相談員 兼 介護福祉士)

功 績 ほとんどの他事業所で受け入れ困難とされた重度利用者を積極的に受け入れ、ご本人だけでなく介護に疲弊していたご家族を支えたことに対する功績。

文京区在住の利用者だが、迅速な対応と多職種連携により安全なサービス提供を実現し、地域における「最後の受け皿」としての役割を果たしたことで、法人の信頼向上と地域福祉への大きな貢献につながった。

推薦者氏名 (通所介護主任 舟山靖紀)

推薦理由 他事業所で受け入れ困難とされた重度利用者に対し、「ご本人とご家族を支える」という強い思いのもと受け入れを速やかに決断。また、多職種連携で、医療的ケアや高い介護負担がある中でも、安心して過ごせる環境づくりに尽力した。

その結果、ご本人の笑顔を取り戻し、介護に疲弊していたご家族を支えることにつながるなど、法人理念を体現する実践となった功績を称え、理事長賞に推薦いたします。

内 容

2月初旬、キーパーソンの娘さんから一本の切迫した電話相談が入りました。直近1ヶ月以上入浴できておらず、近隣だけでなく隣接区の事業所にまで必死に電話をかけ続けている状況でした。「せめてお風呂に入れてあげたいのですが、もう限界なんです。」娘さんの声から、長期間にわたる介護疲労と、行き場のない切実な思いが伝わってきました。

Aさんは、脳梗塞後遺症による右片麻痺ならびに胃の2/3切除にて鼻腔栄養を実施している、ほぼ寝たきりの要介護5でした。また、過去にチューブを自己抜去された経緯があったことから、健側上肢を拘束せざるを得ない状況で、さらに体重70kg近くあって、身体介助の負担も大きいことから、ほとんどのデイサービスから「入浴対応が困難」と受け入れを断られていました。

(一時、訪問入浴を利用されたものの、常に介助補助を頼まれ、心身ともに休まることなく、ショートステイ利用時では褥瘡ができて戻られた経験あって、「もうショートには預けられない」といった背景から、懸命にデイサービスを探されていました)

しかし、受け入れには多くの課題がありました。送迎範囲外であること、経管栄養管理、チューブ抜去リスク、移乗介助の負担、身体拘束への配慮、さらには胃切除後のため経管栄養に長時間を要することなど、現場職員への負荷は極めて大きいことが予想されました。

そのような中、門傳さんは、「困難なケースだからこそ、ご家族を支えなければならない」という強い信念のもと、まず現場職員や看護師へ丁寧に状況を説明し、理解を求めました。現場からは当初、不安や戸惑いの声がありましたが、「娘様が限界に達していること」、「次の受け入れ先が見つかるまで支えよう」という思いを職員全員で共有し、受け入れを決断しました。

電話相談の翌日には自宅訪問し、アセスメントと契約を実施。その翌日には利用開始という、極めて迅速

な対応を行いました。

利用初日、娘さんは不安から付き添いで来所され、経管栄養や入浴、排泄介助について細かく説明を行っていただきました。門傳さんはその内容を一つ一つ整理して手順書を作成、安全に安心して過ごせる環境づくりに努めました。

初めは緊張から表情が硬かったAさんでしたが、帰宅後に娘さんへ「お風呂が気持ちよかった」と笑顔で話されたと連絡が入りました。

その後も、看護師がマンツーマンで寄り添い続け、介護職員も日々声を掛けながら関わりを重ねました。リハビリではセラピストが座位保持や立位保持に取り組み、その中でAさんは、かつて子どもたちに空手を教えていたことなど、ご自身の人生について穏やかに語ってくださるようになりました。次第に笑顔が増えていき、デイサービスで過ごす時間そのものが、Aさんと娘さんにとって安心できる場所となっていました。

約2ヶ月後の4月中旬、近隣で受け入れ可能な新たなデイサービスが見つかり、無事に移行することとなりました。介護タクシー利用で月10万円近い負担をされていたので、私たちは「ようやく安心して通える場所につながった」と胸をなで下ろしました。4月はAさんのお誕生月でしたので、最後に職員一同で誕生日カードを作成しました。そこには、笑顔のAさんの写真と、関わった職員一人ひとりが温かなメッセージを添えました。後日、そのカードを届けた際、娘様は涙ながらに、「本当にけやきさんには感謝しています。私たち家族を支えていただき、本当にありがとうございました」と深く感謝の言葉を述べられました。